

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	川村由美
論文題目	Immortal Longings J. M. Coetzee の <i>Waiting for the Barbarians</i> 及び <i>Disgrace</i> における 命を巡る思索
<p>審査要旨</p> <p>川村由美さんの論文審査について報告する。審査は2018年12月22日の午後3時から5時まで、戸山キャンパス39号館5階の第5会議室で行われた。審査員は主任審査員の都甲幸治（早稲田大学）と副審査委員の小田島恒志（早稲田大学）、ならびに田尻芳樹（東京大学）である。当日は川村さんからの内容説明に続いて、活潑な議論が交わされた。</p> <p>論文内容は以下の通りである。本論文は南アフリカ出身の白人作家 J. M. Coetzee (1940-) の作品から、<i>Waiting for the Barbarians</i> (以下 <i>WFB</i>) (1980) と <i>Disgrace</i> (1999) を取り上げ、著者の思索を追っている。以下にその特徴を二つ述べる。</p> <p>本論の特徴は第一に、両作品の創作ノートの研究に多くを負っているという点だ。その結果、二作の間に反復を見出している。ただしそれは単純な反復ではなく、時間の推移を背景にした反復である。そのため両作品の発表は <i>WFB</i> が 1980 年、<i>Disgrace</i> が 1999 年と約 20 年もの開きがあるにも関わらず、また外形上はまったく異なる物語であるにも関わらず、二作には続編と呼びうるような側面があることを主張している。</p> <p>このような視点に立った上で本論は第二に、Coetzee が二作を通じてどのような思索を行なっているかという点に注目している。前述の時間的推移は、Coetzee が体験した歴史的時間と重ねうる。すなわち各時代における Coetzee の思索が、この二作に表現されていると考えられる。本論では <i>Disgrace</i> の状況を現在と位置づけ、過去から現在を通過し、未来への展望に至る Coetzee の思索を追っている。そしてその結果、彼の思索には命という核があること、すなわち命を巡る思索なのだという結論を導き出している。したがって生と死と、救済としての愛という小説の普遍的テーマを Coetzee もまた踏襲している。ただし Coetzee を Coetzee たらしめているのは異人種、女性、動物など「他者」の命にこのテーマの重点が置かれている点だ。いいかえればそれは「他者の命を、命そのものとして、どう感じ取るか」という問題に対する Coetzee の取り組みなのである。</p> <p>これは非常に困難な取り組みである。なぜならば Coetzee の思索は、ポストモダン思想が発見した現実把握のなかにあり、この現実においては言葉が真実に——他者はもちろん、自分の真実にさえ——行き着くことはできないからだ。したがって真実を伝達することもできない。このような現実のなかで Coetzee は権力によって見失われた他者の命にリアリティー——存在するという真実——を見出し、言葉でその命を回復させようとする。とすれば彼は同時に伝達機能がすでに失われた言葉から、その機能の回復も試みなければならないのである。本論はその困難な試みを仔細に見つめている。</p> <p>Coetzee の作品に対しては、しばしばとらえ難さが表明されてきた。しかし本論は <i>WFB</i> と <i>Disgrace</i> の二作品を続編関係のなかに置くことで、彼の作品に一貫した思索を見出している。本論ではさらに <i>Disgrace</i> のあとに出版された <i>Slow man</i> や <i>The Childhood of Jesus, The Schooldays of Jesus</i> に、本論で述べた思索が引き継がれている点にも言及し、Coetzee の半生に渡る最も根本的であり、最も重要な思索の流れに初めて光を当てている。章ごとの内容は以下の通りである。</p> <p>第一章では <i>WFB</i> を取り上げ、この物語における“death”の意味をまず論じている。さらにこの</p>	

氏名 川村由美

“death” に対する語り手の取り組みを探求している。

第二章では *WFB* 創作ノート の読解を通じて、*Disgrace* における *WFB* の反復、及び続編と位置づけられる側面を導き出している。その上で二作が反復及び続編関係にあることの意味を論じている。

第三章では両作を貫く父と娘のパターンを *Disgrace* を中心に導き出し、そこに男性性における支配の暴力、及びその歴史的な連鎖が映し出される様子を見つめている。

第四章では *Disgrace* の David の成長をとらえている。具体的には父の座を追われ死の意識を深めていく David が “immortal longings” に至る過程である。そこには普遍的倫理への模索が見える。

第五章では David の娘 Lucy が、David の旧弊な思考形式では想像し得ない未来の構築にどのように取り組んでいるかを考察した。また *WFB*, *Disgrace* で行なわれた思索は、主に *The Childhood of Jesus*, *The Schooldays of Jesus* に引き継がれている点にも触れている。

本論文は J. M. Coetzee の *WFB* と *Disgrace* を取り上げ、著者の思索を追った。突き詰めればそれは「命」を巡る思索であった。Coetzee はインタビューで “in South Africa it is not possible to deny the authority of suffering and therefore of the body” と語っている。おそらく Coetzee の思索の出発点はここにある。この地点からどのように他者の命を認識し、尊重しうるかが模索されているのである。両作品においてはあからさまな暴力を奮うことのない人物の暴力性が探求され、その上でどう成長しうるかが模索されている。そして特に *Disgrace* においては “immortal longings” が David の大きな成果であるだろう。“immortal longings” は彼だけのためのものではなく、他者のための——女たちの、とりわけ動物たちの、さらには生きるものすべてのための——命を願う歌であるのだ。そして David は未来に “a single authentic note of immortal longing” を伝えようとしている。

命を巡る思索は、主に処女懐胎の物語が反復される *The Childhood of Jesus*, さらに *The Schooldays of Jesus* に引き継がれていく。そこでは未来の創造へ向けての思索が始まっている。理性に替わるような新たな価値基準が模索されているのである。試行錯誤の思索は今も続いている。内容説明に続く議論では、語句の修正から、三位一体という概念の理解の妥当性まで、幅広い意見が出された。しかしながら大幅な修正は必要ではないとの意見で審査員は一致した。本論文は博士学位授与に値するというのが審査委員会全員の意見である。

公開審査会開催日	2018年 12月 22日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	都甲 幸治	現代アメリカ文学・文化	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小田島 恒志	現代イギリス小説、現代英米演劇	
審査委員	東京大学大学院総合文化研究科・教授	田尻 芳樹	英米・英語圏文学、ヨーロッパ文学	博士(ロンドン大学)
審査委員				
審査委員				